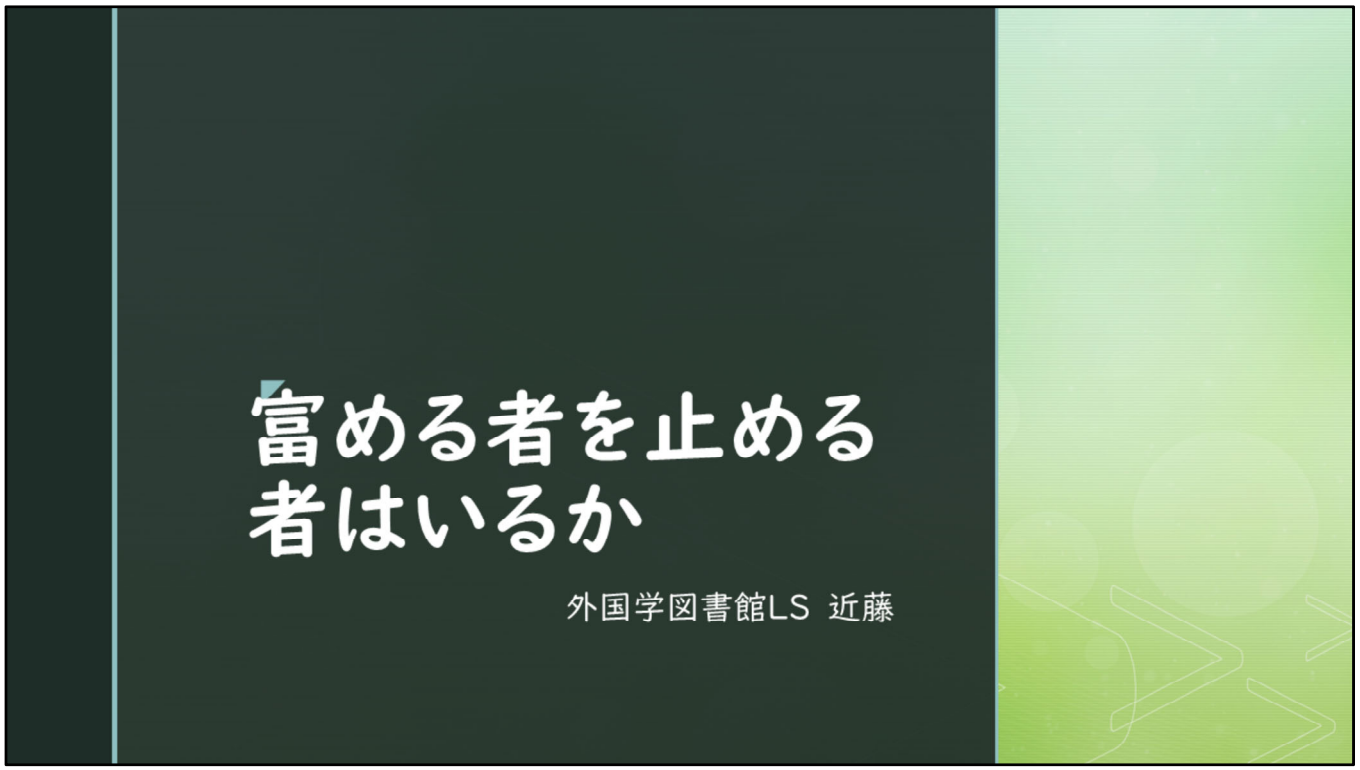
紙上講習会「富める者を止める者はいるか」
2021年3月 言語文化研究科博士後期課程3年 近藤（外国学図書館LS）



目次

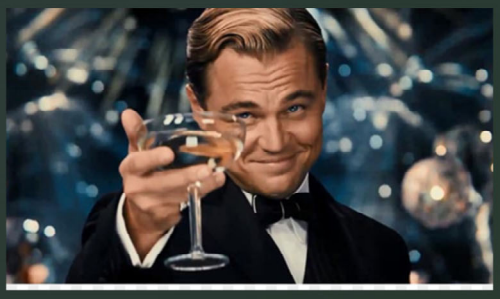
1. クレイジー・リッチ・アメリカン
2. 既に崩壊していたアメリカン・ドリーム
3. 金融街の狼たちの罪と罰

アメリカの経済紙、Forbesによると（1）、アマゾン創設者のジェフ・ベゾス($179 billion; 約1790億円)が世界一の大富豪、それに続くのがマイクロソフト社創設者のビル・ゲイツ($111 billion; 約1110億円)、そしてフェイスブックのマーク・ザッカーバーグ($85 billion; 約850億円)は第3位と、世界で最も富める3人はアメリカ人です（それも白人男性）。

このランキングに入ってはいませんが、大富豪のイメージを持つ有名なアメリカ人として、例えばリアリティ番組から自らの「帝国」を築いたキム・カーダシアンや、前大統領のドナルド・トランプ（なお多額の借金を抱えていることが最近の報道で明らかになっているので、あくまでも「イメージ」です）を挙げることが出来るでしょう。

(1) https://www.forbes.com/forbes-400

紙上講習会「富める者を止める者はいるか」
2021年3月 言語文化研究科博士後期課程3年 近藤（外国学図書館 LS）



1．クレイジー・リッチ・アメリカン

本章のタイトルを「クレイジー・リッチ・アメリカンズ」としましたが、それは日本でも注目を浴びた映画・小説 *Crazy Rich Asians*（原作は2013年、映画は2018年）から取ってきています。

このタイトルには二つの意味があります。つまり、ありえないほど（crazy)裕福なアジア人という意味と、クレイジーな金持ちアジア人（浮世離れしていて信じられないような生活をしている）という意味です。本章のタイトルもそのクレイジーという言葉の持つ二つの意味を込めてつけました。

そんなクレイジー・リッチ・アメリカンですが、そんな人々の暮らしぶりに、文化のコンテンツを消費する我々はある種取りつかれているのではないか。つまり、富める者たちに歯止めをかけようとする一方で、やはり彼らを描こうとする衝動があるということです。だとすれば、それには一体どんな例があるでしょうか。そしてそういった例はアメリカの社会のイメージをどういった形で映し出しているのか、ということを、きわめて部分的な考察になってしまいますが試みてみたいと思います。

1．クレイジー・リッチ・アメリカン

The Cutというアメリカの雑誌によるポッドキャスト（2）では、この現象を取りあげていました。今回の紙面講習会の源泉だと言えます。乱暴にその放送回の結論をまとめてしまうと、こういった人々とは、常に批判の対象でありながら、同時に羨望の対象であり続けている、ということです。

そして、現実であっても「クレイジー・リッチ・アメリカン」とは、もちろん安易に一般化はできませんが、時にダメな人間であると同時に、ひどく興味深い人間であるのです。つまり、賛同するにせよ、批判するにせよ、作品の中にそういった人々を描かずにはいられない、ということです。そういった側面をフィクションもうまくすくい出して、後世に残る作品が今までも生まれてきました。

(2) https://www.thecut.com/2020/09/the-cut-podcast-rich-people-problems.html

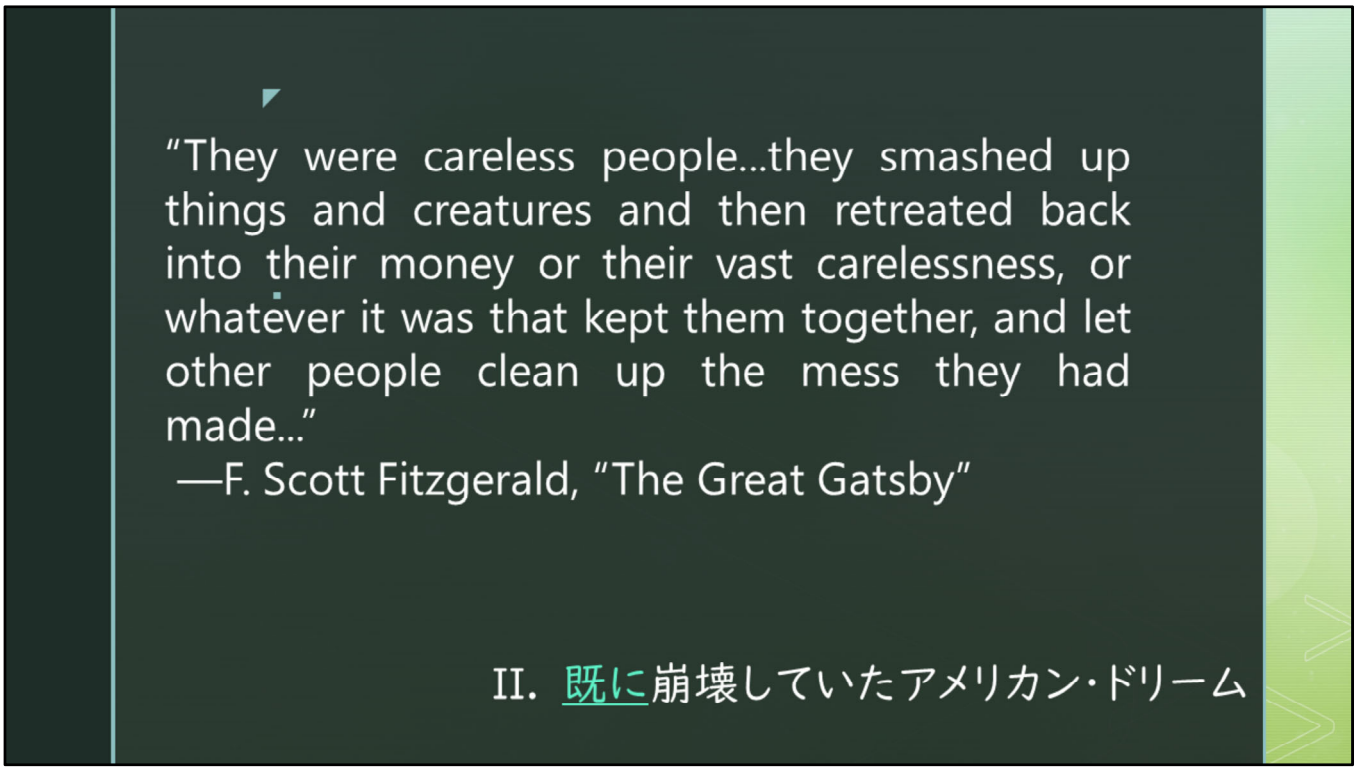
この章では、アメリカ文学における金字塔*The Great Gatsby*（『グレート・ギャツビー』『偉大なるギャツビー』『華麗なるギャツビー』など)について少し考えてみたいと思います。なお、結末部分について触れます。ご了承ください。

この作品は、1925年に出版され、当初はあまり評価が芳しくなかったようですが、およそ一世紀が経った2020年の時点で5度も映画化されており(1926, 1949, 1974, 2000, 2013)、間違いなく人々の記憶にとどまり続けている作品だと言えるでしょう。この作品のメインキャラクターは、語り手を除けば基本的にお金持ちばかりです。

主人公ギャツビーは、禁酒法がまだあった1920年代において密酒で一財を成した男ですし、彼が想い続けるデイジーも、彼の夫トム・ブキャノンも裕福な家の人間です。ブキャノン夫婦はとりわけ家族の富を相続しているだけで、いわゆるOld Moneyと呼ばれる人々ですが、ギャツビーはいわゆる「成金」です。本作ではNew Moneyという表現が使われています。しかしこの「成金」という成功パターンこそが、「アメリカン・ドリーム」という考え方によるところの理想の成功パターンなのです。「アメリカン・ドリーム」とは、だれしもチャンスを与えられる自由の国アメリカで、自分の努力でもって一気に社会的経済的成功を収めることです。

しかしながら、この小説を最後まで読むと、この「アメリカン・ドリーム」を本当にギャツビーは成し遂げて幸せになれたのか、という疑問が生じてきます。たしかに彼は巨額の富を得ましたが、非合法な商売に身を投じてまで得たその成功は、デイジーを手に入れるためのものでした。最終的に彼は彼女と一緒になれることはできず、誤解から自宅で銃撃され、その生を突如終えることとなります。1度は離婚する可能性すらあったブキャノン夫婦ですが、その優雅で安定した暮らしをデイジーもトムも諦められるはずもなく、結局二人は元の鞘に収まります。これはあくまでも語り手の知りえる範囲のことですが、ギャツビーの死によって二人が自らの生き方を抜本的に見直すようなことはなかったのです。

このように本作の展開を踏まえると、大金持ちにも成金か否かという区分がこの作品には確かに存在しており、「アメリカン・ドリーム・コース」でのし上がってきた人間に安直なハッピーエンドが用意されていないのが本作なのです。「アメリカン・ドリーム」という考え方は、富とセットで幸福も手にすることを含意していますが、100年前に発表された本作を読む限りでは、既にその考え方は崩壊しているのではないか、とさえ思えてしまうのです。



この紙面講習会でこの小説について触れたかったのは、やはり2020年アメリカ大統領選前の10月に上のような『ギャツビー』からの引用文がTwitter上で多くの人の共感を得たからです(3)。訳してみると、「彼らは軽薄な人々だった---彼らはモノや生き物をたたき壊しておいて、自らの金へと、あるいは彼らの大いなる薄さ、もしくは彼らをまとめあげていたものに戻っていった。そして彼らは自分たちが散らかしたものを他の人間に片づけさせるのであった」といったところでしょうか。

このツイートは、ドナルド・トランプ前大統領が新型コロナウイルスに感染した際、自分たちの言動によって影響を確実に受ける、アメリカの一般庶民たちのことを全く考えていないその軽薄さを表した引用文です。このTheyが指すのは、当然ブキャナン夫婦のような人々を指している訳ですが、この「周りを散らかしてもほったらかし」という、富める者の欠点はフィクションでも現実でも確認できる、ということなのです。

(3)https://twitter.com/HistoryCounts/status/1312092169612726273
なお、ニューヨークタイムズもこのツイートの背景を解説する記事を発表している。
https://www.nytimes.com/2020/10/07/books/great-gatsby-quote-trump.html

さあ、それでは20世紀末まで時代を進めます。ここで、再びレオナルド・ディカプリオに登場してもらいましょう。今度は映画のお話です。

2013年公開の『ウルフ・オブ・ウォールストリート』という映画をご紹介したいと思います。主演はレオナルド・ディカプリオで（あの『タイタニック』から15年以上経っています）監督はマーティン・スコセッシ
（『タクシードライバー』や『グッドフェローズ』など、現代アメリカの犯罪映画で名を馳せた監督）です。

「レオナルド・ディカプリオとマーティン・スコセッシ監督が5度目のタッグを組み、実在の株式ブローカー、ジョーダン・ベルフォートのセンセーショナルな半生を描いた。22歳でウォール街の投資銀行へ飛び込んだジョーダンは、学歴もコネも経験もなかったが、誰も思いつかない斬新な発想と巧みな話術で瞬く間になりあがっていく。26歳で証券会社を設立し、年収4900万ドルを稼ぐようになったジョーダンは、常識外れな金遣いの粗さで世間を驚かせる。全てを手に入れ「ウォール街のウルフ」と呼ばれるようになったジョーダンだったが、その行く末には想像を絶する破滅が待ち受けていた」（映画.com）(4)

(4) https://eiga.com/movie/78790/

以上のあらすじの引用の通り、彼は欲望の赴くままに生きる男です。それでいて、その奔放ぶりを誰も咎めようとしない。『グレート・ギャツビー』でディカプリオが演じた、陰はあるが、気品もある裕福な紳士とは対照的な男です。全編3時間、罵り言葉を連発し、狂いに狂ったライフスタイルをひたすら見せてくる映画で、抱腹絶倒もののブラックコメディとして一級品だと個人的には思っています。

本作で特筆すべき点はジョーダン・ベルフォートの転落もはっきりと見せているところにあります。ウソを塗り重ね、庶民の富を吸い上げてできた彼の「砂の城」は本人の逮捕をもって一気に崩れていきます。しかし、実際のところ、買収により彼の刑務所生活は悠々自適なものに変わり、やがてカリスマとして講演会で人々の注目を集める存在となり、またしても大金持ちへの道を今度はその逮捕歴をもって突き進む訳です。結局自分の犯した罪に対してあまり大した罰を受けないまま、人々の欲望の受け皿として活躍できてしまうのがアメリカ社会であるようです。

その証拠に、最後のシーンでカメラは講演会を大変興味深く聞いている観衆に向けられます。分かっていてもまたこのペテン師に騙されるのが運命づけられていることをやんわり示しているかのようです。

紙上講習会「富める者を止める者はいるか」
2021年3月 言語文化研究科博士後期課程3年 近藤（外国学図書館 LS）

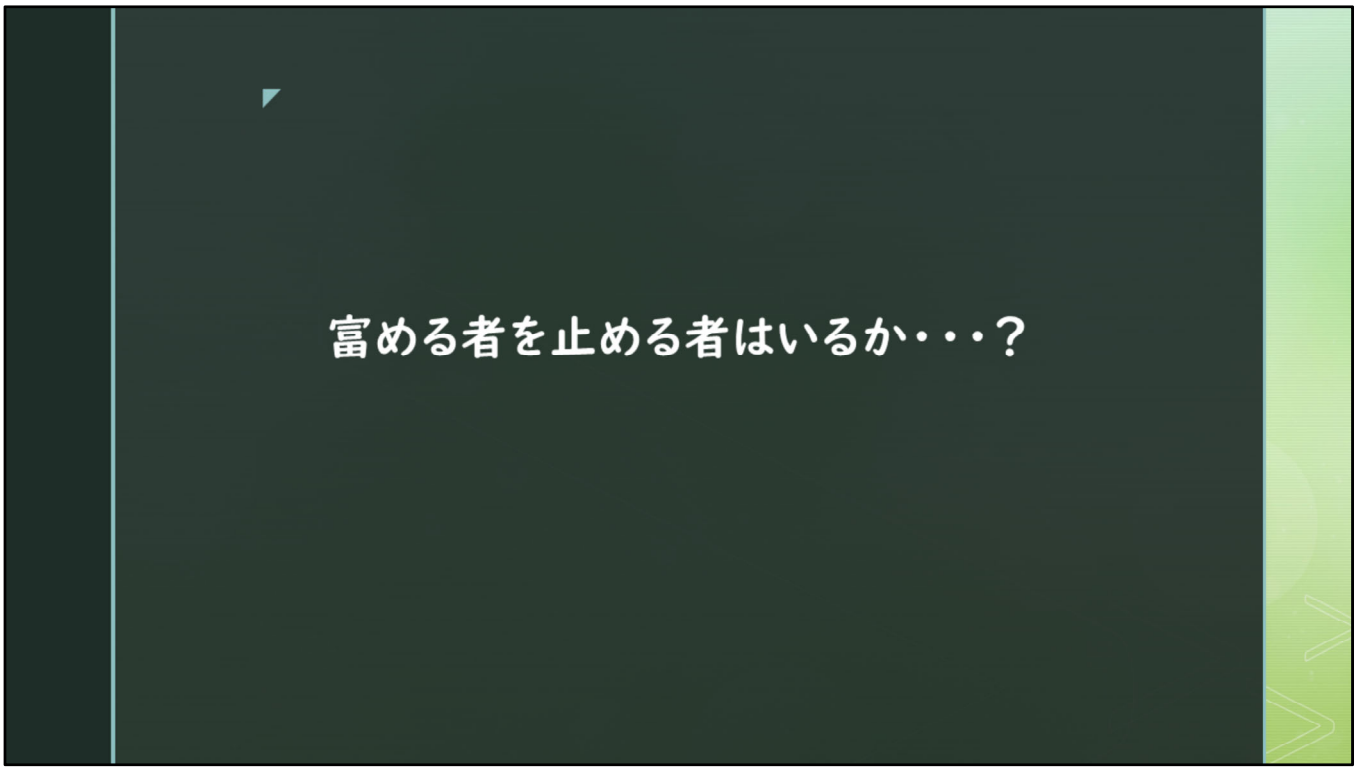
現代アメリカの金融街を語る上では、2008年の金融危機（リーマン・ショック)を外すことはできません。

その代表格としてまずアダム・マッケイ監督の『マネー・ショート』(2015)が挙げられます。こちらは『ウルフ・オブ・ウォールストリート』が多用していた「登場人物がカメラに向かってしゃべる」（「第四の壁」を破る）手法を踏襲して、いかに金融街の利己的なシステムが暴走して金融危機を引き起したのか、コミカルに説明してくれます。主人公たちは市場が崩壊するということに賭けたことで大儲けした男たちですが、彼らもラストでアメリカの悲惨な状況に絶望するだけの良心の呵責は見せています。

では、その市場崩壊により、悲惨な目にあった女性たちはどのような行動（反撃）に出たのか？ということを描いたのが、ローリーン・スカファリア監督の『ハスラーズ』(2019)です。これは（金銭的にも性的にも）搾取され続けるストリッパーたちが、金融危機の後、金融マンを標的に詐欺を行っていくという映画です。次から次へと流れてくる当時の懐かしいポップスが本作をほろ苦く彩っており、女性たちの目線であの時の厳しかった経済状況が描かれていきます。先述した2本の映画でやはり金融の世界における男中心のマッチョな文化ばかりが描かれているのとは対照的だと言えます。

最後に、まだ日本では公開されていませんが、*Buffaloed* (2019) という映画も少しだけ紹介します。この映画は『ハスラーズ』のその先を行っており、田舎の若い女性がジョーダン・ベルフォートのように詐欺師まがいのことをしてみるとどうなるか？というストーリーで、こちらもとても面白い作品になっていました。リーマン・ショックの波を受けて地方全体が経済的に困窮しているという状況が物語の背景にあり、大学進学するお金がないという
ところが主人公の動機となっていました。

いずれにせよ、この3作における「束の間の金銭的成功」は「主人公たちの最大の幸福」に必ずしもつながってはいません（みんな結構タフにその後生きていますが）。必ずどこかで限界が来て後悔せざるをえなくなります。そして皆が大金を稼ぐことに味を占めてしまい、止めどころが分からなくなっているという共通点も挙げられます。アメリカン・ドリームははた目からすれば達成できているのかもしれませんが、欲望が肥大化し続ける人々には「金持ち」になる終着点がもはや見えなくなっているのです。



　そこで今回のタイトルに戻ってくる訳なのですが、今回紹介した作品内の世界を見る限り、どちらかと言えば答えは「No」に近いかもしれません。
しかしながら、今まで紹介してきたフィクション自体が富を巡って、現実で実際に起こりそうな様々な想定（シナリオ）を用意してくれていたり、また人々の欲望を反映していたりする、ということは事実でしょう。「富める者を止める者」は残念ながらそこまで多くはないのかもしれませんが、「富める者」をコンテンツとして消費し続ける我々の関心はたしかにあるはずです。（了）